



## Nagoya City University Academic Repository

学位の種類	博士（人間文化）
報告番号	甲第1447号
学位記番号	第20号
氏名	野田 いおり
授与年月日	平成26年3月25日
学位論文の題名	『ボヴァリー夫人』におけるジェンダー構造の考察 A Consideration of Gender Structure in Madam Bovary
論文審査担当者	主査： 山本 明代 副査： 土屋 勝彦，田中 敬子，村田 京子

『ボヴァリー夫人』におけるジェンダー構造の考察

A Consideration of Gender Structure  
in *Madame Bovary*

平成 25 年度 博士論文  
要旨

名古屋市立大学大学院人間文化研究科  
人間文化専攻

指導教員 山本 明代教授

学籍番号 104804

氏 名 野田 いおり

本研究はフェミニズム批評の中でも、とくに「ジェンダー」という概念を用いた文学研究の一実践である。考察の対象として、リアリズム文学の祖とも称され、19世紀のフランス文学を代表する作家ギュスターヴ・フロベールの傑作、『ボヴァリー夫人』を取り上げた。

研究の目的は、文学研究において、個々に独立して研究されてきた「作品」、「作家」、「テクスト」という三つの対象にジェンダー的なアプローチを行い、重層的なジェンダー意識の影響関係を考察し、『ボヴァリー夫人』という文学作品を体系的に捉えなおすことである。

考察の方法として、以下の2点を議論の中心に据えた。すなわち、『ボヴァリー夫人』のテクスト分析に歴史的視点を導入し、同作品の社会背景を明らかにした上で多角的な分析をすること。次に、ジェンダー分析を行うにあたり、「脱構築理論」を用い、二項対立のジェンダー構造を提示し、それらが「脱構築」にいたるプロセスの解明を行うことである。

論文の構成は第Ⅰ部から第Ⅴ部までの五部構成である。第Ⅰ部ではセックスとジェンダー、男と女という二項対立からの「逸脱」、第Ⅱ部では、公共圏から親密圏への「流入」、第Ⅲ部では、語りに見られる積極性と保守性の「反転・逸脱」、第Ⅳ部では、男女の性役割の「逆転」、そして第Ⅴ部では、二項対立の背景にある「共通性」という各々5つのテーマを設定し、それらに対してジェンダー的分析視角で論を展開した。

まず、第Ⅰ部では、セックスとジェンダーという二項対立からの「逸脱」をテーマに、フロベールの生い立ちや現存する書簡を手掛かりとして、フロベールの性格の特徴、女性観やジェンダー意識を明らかにした。フロベールの性格の特徴は、一つの事柄に対して肯定と否定という二律背反的な価値づけをすることである。そして、二項対立のどちらか一方を選択するのではなく、相反性を付与したまま受け入れるスタンスを取っている。このような二項対立の構造がフロベールの精神性の基盤となっている。

また、フロベールの女性観やジェンダー意識は、女性全般に対しても、恋人に対しても、肯定と否定、畏敬と嫌悪、尊敬と侮蔑

など、アンビバレントな両義的スタンスが見られるのが特徴である。当時の多くの男性たちが、恋人や妻という私的領域に属する女性に対してでさえも、公共的価値規範によって類型化した女性像を要求していたことを考えると、フロベールのように、女性に両義的な価値づけをするということは、男・女という枠組みにとられない「個人」という観念の形成の萌芽や、当時の男・女の社会規範構造から「逸脱」した前衛的なジェンダー意識をみることが出来る。

次に、第Ⅱ部では、公共圏から親密圏への「流入」をテーマに、公共圏と親密圏という「場」における二項対立の構造について分析を行った。

公共性の圏域における男性優位のジェンダー規範は、教育を通じてエンマの内面に影響を与えている。当時の女子教育には、保守性と積極性の相反する両義性が見られる。両義的価値を持った女子教育によって、無意識のうちに保守的な価値意識を養ったエンマが、実生活においては積極的に自己了解を求める姿は、保守性と積極性が流入、混在した形であり、女子教育の持つ二項対立構造に組み込まれず、そこから逸脱しようとするものである。

また、公共圏と親密圏をむすぶ媒体（メディア）としての読書にも着目した。七月王政の読書は、「自己実現」、「個人の楽しみ」といった親密圏の充足をはかる側面がありつつ、一方では「読書をする」という行為そのものが男性優位の公共的規範性を補完するというアンビバレントな二面性を持っている。

第Ⅱ部では、公共圏と親密圏、女子教育の保守性と積極性、エンマの振る舞いにおける従順と反抗などの二項対立構造を明らかにした。しかし、これらの関係性は常に対立構造を示すわけではない。時には「流入」し、融合して、二項対立の枠組みを解体する。『ボヴァリー夫人』は、公共圏と親密圏という「場」の流入、融合によってもたらされた一義的ではないジェンダー構造を背景とし、積極的な「生」を希求して、そのジェンダー構造の枠組みから逸脱しようとした一人の女の物語であると言えるだろう。

第Ⅲ部では、二項対立構造の「反転・逸脱」をテーマに、「語り」に見られるジェンダー性を明らかにした。

まず、男性の視線にさらされるエンマと、その身体の語られ方について分析した。男たちはエンマに対し、性規範と好色、理想と通俗（現実）、貞淑と不貞、憧れと畏怖といった二項対立構造を持つ身勝手な視線を送り続けてエンマの身体を評価し、視覚的に拘束しようとする。エンマはこのような男性の視線による閉塞感から逃れようと葛藤し、自らが男性を評価する「見る主体」となることに挑戦し、男性優位の視線の拘束からの解放を試みている。

次に、エンマの身体を彩る色彩の「青」が、どのような意味を付与されているのかについて、登場人物の視点や視線を通してジェンダー的アプローチを行った。

男たちの視線を受容し、「見られ、語られ、評価される」客体であったエンマが、自らの身体に付与された二項対立の意味づけを「反転」させ、その構造の中に組み込まれることなく、自由な意志でそこから逸脱すると、愛情を示されなくなり、裏切られ、不幸になり、最終的には死に追いやられるというストーリーは、男性優位社会における女性の自由の限界を示すものである。

「語り」や「語られ方（視線・視点）」に着目することで、ストーリーとは直接的には関係のない風景描写やさまざまな表象（動物や道具立てなど）を通して、細部に張り巡らされた『ボヴァリー夫人』のジェンダー構造の男女間の歪みを見ることができる。

第Ⅳ部では、男女の性役割の「逆転」をテーマに、エンマの「男性化」、シャルルの「女性化」のプロセスを通して、登場人物のジェンダー的自己了解の変化を分析した。

エンマの「男性化」という現象は、男性優位のジェンダー規範を無意識的に受容し、無意識的に抑圧された女性が、自己否定をすることによって、支配的ジェンダーへと自分を変身させていく過程である。それは自己解放された姿ではなく、ジェンダー的抑圧に屈している姿ともいえる。この複雑な二重構造は、当時の社会が抱えるジェンダー間の問題の複雑さを示している。

また、シャルルの性役割が男性から女性へと越境し、脱男性化、「女性化」するプロセスにも焦点を当てた。「男らしさ」を殊更に騒ぎ立て、煽ったのは、当時の社会規範である。「男らしさ」という男性規範はシャルルが望むものではなかった。したがって、シ

シャルルの脱男性は、公共圏における自己否定であり、親密圏における自己肯定と考えられる。

「男」と「女」という二項対立の構造の枠組みから逸脱し、エンマとシャルルは自らの幸せの形を追い求めた。その結果、シャルルは女性化し、エンマは男性化する。『ボヴァリー夫人』は、自らの性の二項対立の構造を越境し、「逆転」させた男女のすれ違いが引き起こした苦悩と葛藤の物語であるとも言えるのではないか。

最後に、第Ⅴ部では、二項対立の背景にある「共通性」というテーマで、『医師の妻』と『女の一生』を取り上げ、『ボヴァリー夫人』との比較を行った。『医師の妻』に関しては、イギリスとフランス、男性作家と女性作家、芸術家と大衆小説家がもたらす二項対立の構造はあるものの、両作品に共通するのは女性の閉塞感である。両作品を比較した結果、当時のジェンダー規範が抱える共通の問題が浮き彫りになった。

さらに、『ボヴァリー夫人』と『女の一生』を比較してみると、両作品は、人間の宿命的な悲しい生の営みを描くという主題を共通に持っている。たとえ主人公の性格の内面が異なり、それぞれの事象に対するスタンスが異なっているとしても、生きることの悲しみ、苦悩は共通のものである。エンマのように積極的に生きても、ジャンヌのように社会規範に従って保守的に生きても幸せになれない二人の姿は、当時の女性たち共通に共通する生きる苦しみと葛藤を代弁しており、女性たちの幸せの限界を表している。

以上のような考察を通して、全体の結論を示すと、以下の通りである。フロベールのアンビバレントな女性観やジェンダー意識は、女子教育、読書、表象、視線、身体の意味において、男性性と女性性、公共圏と親密圏、自己と他者、規範と自由、意識と無意識、発話と沈黙などの二項対立として、テクストのいたるところで網の目のようなストラテジーを張り巡らしている。

このような二項対立構造は、七月王政期の社会的特徴である男性優位のジェンダー規範とエンマの苦悩・葛藤の関係性にも影響を及ぼしている。エンマの苦しみはこの二項対立の枠組みに位置づけられることであり、一方でその枠組みに留まりたいと願うジレンマである。このジレンマが登場人物のジェンダー性の「揺ら

ぎ」という現象を引き起こし、その背景にある二項対立構造は、融合、流入、逆転、錯綜を引き起こし、脱構築をするのである。

本論文では、『ボヴァリー夫人』の新たな読み方を提案するため、歴史的考察を加えてテクスト分析を行い、『ボヴァリー夫人』をジェンダー的視点で論考し、二項対立の構造を見いだした上でその枠組みを解体するという試みを行ってきた。

保守的な男性優位の社会において、積極的に生きることが諦めなかったエンマの姿は、新たな生き方を模索した「新しい女」の萌芽であり、規範を逸脱しても自らの幸せを肯定し続けたシャルルの姿は、男・女というジェンダー的枠組みを脱構築するものである。人間が生を営む社会を描いた『ボヴァリー夫人』という文学作品は、アイロニーと風刺に満ちて、その時代に生きた人々の心象世界を詳細に描き出し、感情を付与された歴史的資料として、その時代を鮮明に映し出している。